

江戸前の環境学

編者 川辺みどり、河野博 出版社 東京大学出版会

江戸城下から櫓で漕ぎだした船で漁をして陽の明るいうちに帰ってこられる海—それが本来の「江戸前の海」であろう。おおむねの範囲は多摩川の河口から江戸川の河口あたりを結んだ海域である。この江戸前の海には、多くの州と滞筋が走り、干潟から浅場、沖合といった多様な場があり、さまざまな漁具や漁法によって、多彩な魚—「江戸前の魚」が獲られていた。本来、江戸前の海は豊かな海なのである。

時代の流れとともに船の動力化は進み、「江戸前の海」の範囲はどんどん拡大してきた。しかし、やはり江戸前の海は、房総半島の富津岬と三浦半島の観音崎よりも奥の東京湾の「内湾」までであろう。ただし、さらに南の洲崎と劔崎の間までの海域が「外湾」で、内湾と外湾をあわせた海域がふつうは東京湾とされている。

江戸前の海は、豊饒の海から開発の海へ、そして癒しの海へと変化したが、いつも私たちにその恵みをあたえてくれてきた。多くの漁業協同組合は漁業権を放棄したものの、県知事の「許可漁業」として、江戸前漁業は生きのびている。大都会の灯りや羽田空港のきらめく光のもとで、漁業者は、刺網を張り、あなご筒を入れて、江戸前の魚を獲っている。張りつめた朝の空気に包まれた大自然のなかで、底びき網やまき網の漁船が操業している姿を今も見る事ができる。

こうした江戸前の海の恵みをこれからも私たちが享受し続けていくための「しくみ」を、私たち自身がどのように構築していけばよいのか、読者に考えてもらうきっかけを提供するのが本書の目的である。

まず「第Ⅰ部 東京湾を科学する」では、第1章で東京湾の概要を示したあと、自然科学、すなわち物理学、化学、生物学（プランクトンと魚類）の観点から東京湾にアプローチする。これは、江戸前ESD(Environmental Studies of “Edomae”)の活動のバックボーンをなす「科学」である。

「第Ⅱ部 東京湾を体験する」では、漁業と釣りという東京湾の自然のめぐみをもっとも実感しやすい人間活動の観点からアプローチする。これは海の「政策」に深くかかわる部分である。

最後の「第Ⅲ部 東京湾を考える」は、序章で紹介した江戸前ESDの「学びあい」(=「教育」)の実践を伝えるものである。

さらに序章と終章では、江戸前ESDの理念と活動の

基本を説明し、はたして江戸前の海に学びの環がつくられたのかどうかを検証した。これらをふくめた江戸前の海をめぐる12章が、たんに江戸前の海にとどまらず、広く国内外の沿岸域管理に何らかのヒントを提供することができれば編者としては望外の幸せである。

—本書 はじめに (川辺みどり、河野博) より引用—

◇目次・構成

序章 江戸前の海を学びあう場として

第Ⅰ部 東京湾を科学する

- 第1章 東京湾をまるごと見る ～環境と開発の歴史
- 第2章 東京湾の水の動き ～何が海水を動かすのか
- 第3章 東京湾の水の汚れ ～水質と富栄養化
- 第4章 東京湾のプランクトン ～低次生産者と生態系
コラム 葛西臨海たんけん隊
- 第5章 東京湾の魚類 ～研究史と自然史
コラム 東京湾アーカイブズに見る昔の東京湾

第Ⅱ部 東京湾を体験する

- 第6章 東京湾を漁る ～漁業と漁場のルール
- 第7章 東京湾を釣る ～ハゼ釣りから考える
コラム 江戸前マイスター講座

第Ⅲ部 東京湾を考える

- 第8章 東京湾を伝える ～わかりやすく伝えるために
- 第9章 コミュニケーションの場をつくる ～大学と地域の協働によるデザイン
- 第10章 東京湾をみんなで考える ～今までとひとあじ違うガヴァナンスのために
コラム 江戸前ESDしながわ塾

終章 「江戸前の海」に「学びの環」はつくられたのか



A5版/229頁, 2012年2月出版